理学療法学科に在籍する学生の自己教育力

—— 1 年生と 4 年生の学年間比較 ——

*Self-education Ability of Students Enrolled in a Physical Therapy Department:
A Comparison of First-grade and Fourth-grade Students*

青柳 達也¹⁾ 丸山 仁司²⁾ 菅沼 一男³⁾ 金子 千香³⁾ 齋藤 孝義⁴⁾

TATSUYA AOYAGI, RPT¹⁾, HITOSHI MARUYAMA, RPT, PhD²⁾, KAZUO SUGANUMA, RPT, PhD³⁾, CHIKA KANEKO, RPT³⁾, TAKAYOSHI SAITO⁴⁾

¹⁾ Kurata Hospital: 4-5-26 Higashishindo, Hirathuka-shi, Kanagawa 254-0018, Japan TEL +81 46-53-1955

²⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Science, International University of Health and Welfare

³⁾ Department of Tokyo Physical Therapy, Faculty of Medical Science, Teikyo University of Science

⁴⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Science at Odawara, International University of Health and Welfare

Rigakuryoho Kagaku 31(3): 395-398, 2016. Submitted Nov. 26, 2015. Accepted Jan. 16, 2016.

ABSTRACT: [Purpose] The objective of this study was to compare self-education ability between academic grades in physical therapy education. [Subjects] The subjects were 86 first-grade and 76 fourth-grade students of a physical therapy department. [Methods] A collective survey was administered using a measure of self-learning ability. Self-learning ability comprises four factors (I, growth and development; II, self-objectification and self-control; III academic skills and foundation; IV, confidence, pride, and stability) which were constructed from the answers to 10 question items. [Results] In the comparison of the results, the first-grade students showed significantly higher scores for the total score, and the scores for factors I (growth and development) and II (self-objectification and self-control). [Conclusion] The results showed the first-grade students had high goal-seeking aims and willingness to learn.

Key words: self-education ability, physical therapy department, comparison of academic years

要旨:〔目的〕理学療法教育における自己教育力の学年比較について調査することを目的とした。〔対象〕対象は理学療法学科学生 1 年生 86 名, 4 年生 78 名とした。〔方法〕集合調査法にて自己教育力調査尺度を用いて, アンケートを実施した。自己教育力は側面Ⅰ・成長・発達への志向, 側面Ⅱ・自己の対象化と統制, 側面Ⅲ・学習の技能と基盤, 側面Ⅳ・自信・プライド・安定性からなり, 各側面 10 項目の設問で構成される。〔結果〕群間比較の結果, 総合計得点, 側面Ⅰ・成長・発達への志向, 側面Ⅱ・自己の対象化と統制において 1 年生が有意に高値を示した。〔結語〕1 年生は目標達成への意識や学習意欲が高い状態であったと考えた。

キーワード: 自己教育力, 理学療法学科, 学年間比較

¹⁾ くらた病院: 神奈川県平塚市東真土 4-5-26 (〒254-0018) TEL 046-53-1955

²⁾ 国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科

³⁾ 帝京科学大学 医療科学部 東京理学療法学科

⁴⁾ 国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 理学療法学科

I. はじめに

近年、理学療法士養成校は増加傾向であり、国家試験受験者数は年間1万人を超える¹⁾。理学療法学科へ入学した学生は、将来、理学療法士になるという目標を持って、専門学科のある大学へ進学する。理学療法士は、日々進歩し続ける医療の中で、よりよい医療を提供するために、自ら学ぶ意欲が重要である。

中央教育審議会教育内容等小委員会(1983年)において、自己教育力は主体的に学ぶ意志、態度、能力などをいうと定義されており、具体的な意味内容として、1. 自己教育力とは、まずもって、学習への意欲である。2. 自己教育力は、学習の仕方の習得である。3. 自己教育力は、これからの変化の激しい社会における生き方の問題に関わるものであるという3点が挙げられている。その後、義務教育だけでなく、大学教育の場でも自己教育力育成が重要な課題とされてきた²⁾。

理学療法教育ガイドラインには、理学療法教育は本質的に生涯にわたって継続されなければならないものであると記載してある。その中で、卒前教育が果たす役割とは、理学療法士として生涯にわたり活躍するための資質、知識、技術に関する基礎を築くこと、および医療専門職として必要な新たな知識、技術に出会った際に、それらを自ら学ぶための能力と習慣を形成することであると述べている³⁾。このことから理学療法教育においても自己教育力は必要な要素であると考えられる。

自己教育力に関する報告は、看護師や看護学生を対象として影響する因子分析などの検討報告⁴⁾⁷⁾がされ、看護学生の自己教育力を1年生と4年生の学年間比較を行った先行研究では4年生で自己教育力得点が低くなるという報告がなされている⁸⁾。しかし、理学療法学科の学生を対象とした自己教育力の研究報告はなされていない。

そこで、本研究では、理学療法学科の1年生と4年生を対象に、理学療法教育が自己教育力へ及ぼす影響を調査することを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は2015年度に四年制大学の理学療法学科に在籍する学生164名とした。内訳は1年生が86名(男性42名、女性44名、年齢 18.8 ± 0.71 歳)、4年生が78名(男性41名、女性37名、年齢 21.70 ± 0.48 歳)であった。本研究は、ヘルシンキ宣言に従い、研究参加に同意を得るため、調査を依頼する際、調査の主旨と研究内容、研究への参加は自由意思であり、任意に基づくものであることを明記した。また無記名であり個人特定はせず、プライバシーは保護されること、研究協力の有無や回答内容については学業成績とは関係しないことを説明し同意

署名を得た上で実施した。

2. 方法

対象者に対し、自己教育力調査尺度を用いて、集合調査法によるアンケート調査を実施した。

自己教育力調査尺度は、西村らの作成した尺度⁹⁾を用いた。この尺度はI. 成長・発展への志向、II. 自己の対象化と統制、III. 学習の技能と基盤、IV. 自信・プライド・安定性で、各側面は10項目の設問で構成されている。回答は「はい」「いいえ」の2件法で回答し、「はい」に2点、「いいえ」に1点とし、合計点を算出する。各側面は20点満点で4側面の総合計得点は80点となり、得点が高いほど自己教育力が高いことを示す。この自己教育力調査尺度の再現性、信頼性は検証されている⁹⁾。

統計学的解析は、アンケート結果から得られた自己教育力の各側面について1年生と4年生の学年間で比較した。自己教育力4側面の得点の差の検定にはMann-WhitneyのU検定を適用した。次に差が認められた側面のアンケート項目と学年間の関係を見るために χ^2 検定を行い、関連性の度合いとして ϕ 係数を求めた。統計ソフトはSPSS Statistics21を用い、有意水準は5%未満とした。

III. 結果

Mann-WhitneyのU検定の結果、総合計得点、側面I、側面IIにおいて1年生が有意に高値を示した(表1)。

χ^2 検定の結果、側面Iでは、「将来、他の人から尊敬される人になりたい」($\chi^2=8.488$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=-0.228$), 「たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」($\chi^2=5.501$, $df=1$, $p<0.05$, $\phi=-0.183$), 「自分でなければやれないことをやってみよう」($\chi^2=8.117$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=-0.222$), 「これからもよい仕事をし、多くの人に認められたい」($\chi^2=6.966$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=-0.206$), 「これから専門的な資格や学位などを取りたい」($\chi^2=11.339$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=-0.263$)の設問で回答頻度に差が認められ、1年生が「はい」と回答した者が多かった。また「ほんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い」($\chi^2=4.525$, $df=1$, $p<0.05$, $\phi=-0.166$)の設問において回答頻度に差が認められ、1年生が「いいえ」と回答した者が多かった。またその他の設問において、差は認められなかった。

側面IIでは、「自分のよくないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている」($\chi^2=8.397$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=-0.226$)の設問のみ回答頻度に差が認められ、1年生が「はい」と回答した者が多かった。

表1 自己教育力の総得点及び4側面における1年生と4年生の学年間比較

	総得点	側面Ⅰ 成長・発展 への志向	側面Ⅱ 自己の対象化 と統制	側面Ⅲ 学習の技能と 基盤	側面Ⅳ 自信・プライド ・安定性
1年生	64.6 ± 4.8*	17.8 ± 1.2*	16.5 ± 1.6*	15.1 ± 2.2	15.2 ± 2.0
4年生	62.1 ± 4.7	16.9 ± 1.6	15.7 ± 1.8	14.7 ± 1.9	14.9 ± 2.2

平均値 ± 標準偏差. *: $p < 0.05$.

IV. 考 察

本研究は、理学療法学科の1年生と4年生を対象に、理学療法教育が自己教育力へ及ぼす影響を調査することを目的とした。

群間比較の結果、総合計得点、側面Ⅰ、側面Ⅱにおいて1年生の得点が有意に高値であった。側面Ⅰは自己教育を行っていくうえで基本的な志向性を捉える設問からなる。梶田は自己の成長・発展に関わる感覚とその認知面でのあらわれといった「目標の感覚・意識」とそれらを支える情意的な基盤としての「達成・向上の意欲」という2つの視点から捉えている¹⁰⁾。また、側面Ⅱは側面Ⅰの基本的な志向性に沿って自分自身を一步一步自ら前進させていく力を捉える設問からなり、自分自身の現状と可能性、課題等を認識し、自分自身が選びとった方向へ自分自身が働きかけるという構えと能力を意味している¹⁰⁾。4年生は1年生と比較して、自らを成長、発展させることへの意識が低下しており、目標達成への意欲が低下していると考えられ、自分自身をコントロールして、目標に向かう力が低いことが示唆された。また、4年生の得点が低値となった要因として、臨床実習の影響が考えられる。4年生は評価実習や長期臨床実習を経験しており、実習で習得した知識や技術が深まり、実習指導者や患者など他者との関わりの中で、自分と向き合う機会が増えたことで、自己評価を厳しくしたと考えられる。

差が認められた側面Ⅰ、側面Ⅱの各項目の「はい」、「いいえ」の回答頻度について χ^2 検定を行った。 χ^2 検定の結果、側面Ⅰでは1年生は、「将来、他の人から尊敬される人になりたい」や「たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」、「これから専門的な資格や学位などを取りたい」、などの設問で「はい」と回答する者が有意に多かった。このことから、1年生は自らが思い描く、将来の夢である理学療法士という目標達成への意識や学習意欲が高い状態であったと考える。一方、4年生の得点が低値であった要因として4年間の学習カリキュラムの中で、進級とともに、専門科目の履修や検査・治療技術の習得、臨床実習など、それらの内容や課題のレベルから入学前及び1年次に持っていたイメージと実際の大学生活との不一致を実感し、目標達成

や学習意欲の低下を招いたことが考えられる。

金子らは成績不良と大学不適應の関連性¹¹⁾について述べており、大学不適應を起こしている学生は入学前に持っていた大学生活に対するイメージと実際の学生生活と一致していない学生に多いと報告している¹²⁾。また、理学療法学科の学生は学年進行と共に大学不適應を示す学生が増加すると述べている¹³⁾。このことから大学入学後に専門的な科目を学んでいくうちに自己の適性に疑問を感じ、目標達成の意識が低下したものと考えた。

χ^2 検定の結果、側面Ⅱでは、「自分のよくないところを自分で考え直そう、いつも心がけている」の設問で1年生は「はい」と回答するものが多かった。このことから、1年生は自分自身の感情をコントロールし、他者からの指導や指摘を素直に受け止め、努力していると考えられる。

本研究では、理学療法学科学生の1年生と4年生の自己教育力を比較し、その実態を調査した。1年生は4年生と比較して自己教育力の総合計得点、側面Ⅰ、側面Ⅱの得点が高値であることが明らかになった。1年生は理学療法士の免許取得という目標達成への意識や学習意欲が高い状態であったと考えた。一方で、4年生の自己教育力が低下していることから、今後は、4年生の自己教育力が低下する要因の分析が必要である。

引用文献

- 厚生労働省：資格・試験情報。 http://www.mhlw.go.jp/general/sikaku/successlist/siken08_09/about.html (閲覧日2015年11月1日)。
- 文部科学省 中央教育審議会教育内容等小委員会：「自己教育力」の育成などの視点を提起。文部時報，1983，12：26-34。
- 日本理学療法士協会：理学療法教育ガイドライン1版。 <https://support.japanpt.or.jp> (閲覧日2015年10月10日)。
- 能見清子，杉田由加里，吉本照子：看護師の自己教育力の発展を促すための課題—看護師の自己教育力に関する概念と関連因子についての文献検討より—。千葉看護学会誌，2014，19(2)：65-72。
- 榎本朋子，田邊美津子：看護学生の入学動機と自己教育力との関連。川崎医療短期大学紀要，2012，32：7-13。
- 志戸岡聡子，小笠原ゆかり，野口多恵子：看護専門学校生

- の入学時の自己教育力と受験体験, 進路自己決定, 学習の動機との関連. 日本看護学会論文集 看護教育, 2015, 59-62.
- 7) 畔柳あゆみ, 近藤暁子: 卒後1~3年目看護師の自己教育力, 仕事意欲の比較. 日本看護学会論文集 看護管理, 2013, 79-82.
- 8) ニッ森栄子: 看護大学生の自己教育力に関する断続的研究—在学4年間の自己教育力の変化に焦点をあてて—. 日本看護学教育学会講演集, 2003, 15: 186.
- 9) 西村千代子, 奥野茂代, 小林洋子・他: 看護婦の自己教育力—自己教育力測定尺度の検討—. 日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要, 1995, 11: 22-39.
- 10) 尾崎仁美, 山本恵子: 自己教育性の側面についての検討—学習態度と生き方の問題との関連から—. 大阪大学教育学年報, 1997, 2: 173-184.
- 11) 金子千香, 平林 茂, 菅沼一男・他: 理学療法学科1年生における学年末試験の成績と大学生活不安感との関係. 理学療法科学, 2015, 30(6): 881-885.
- 12) 金子千香, 平林 茂, 菅沼一男・他: 専門職への意識と大学生活に対する入学前のイメージとが理学療法学科新入生に及ぼす影響. 理学療法科学, 2015, 30(4): 595-598.
- 13) 菅沼一男, 平林 茂, 金子千香・他: 理学療法学科学生における大学生活に対する不安について—学年間の比較—. 理学療法科学, 2015, 30(4): 475-478.